１２８号　リフォームー２５

現場見学会―３

三段階目の現場見学会は当然のことながら完成時である。解体時から、中間の内装や設備の仕組みのチェックなどへて、我が家の完成だ。より快適そして便利で、しかもエコや、健康にも配慮した夢の実現だ。お施主様のの思いが直に伝わる時である。

見学者はこれから理想的な我が家のリフォームを考えているからこそ、参加している。三段階をへて、完成をみた現場はご自分のイメージにある我が家に重ね合わせて検証することになる。こんな方法があったのか、自分もこうしたい、あるいは自分ならここはこうする、などのイメージが大きくに膨らみ、夢の我が家が見えることになる楽しい現場見学会だ。

ここで良いことは、お施主様と見学者の交流、見学者同士の交流から人の輪が思わぬ良い結果を生むことになる。お施主様と見学者の関係では、見学者は、他人の家を見せてもらうからには、ご自分のどこの誰と身分を明らかにすることが礼儀であり、身分を明かすことにより、お互いの警戒心が薄れ交流が始まり人の輪が広がることになる。

また近隣関係では、マンションならば、向こう三軒両隣に加えて上下階との口コミによる人の輪交流に発展することになる。リフォーム業者にとって季節の特需であるのエアコンや換気扇の清掃、小修繕工事、一寸困ったことにお役たつこともできる。頼むほうは近隣で顔みしり、まして親しい間柄なら警戒心がなくなり、ハウスクリーニングなど小工事から、補修前の住まいの健康診断に発展し、最後には成約につながることになる。

１２８号　天神様の藤

学問の神様、菅原道真公をご祭神と仰ぎ、寛文２年（１６６２年）道真公の末裔が九州大宰府天満宮より､勧請太宰府の社にならい造営したのが起源とされ由緒ある神社である。爾来、亀戸宰府天満宮とも称され江戸庶民信仰の本源として中枢を占めている。また行楽の名勝地としても知られ、春は梅花に藤の花、秋は菊花など、四季折々の彩りは、正に花の天神様といわれるにふさわしい名所である。

亀戸天神様の藤棚は今が満開真っ盛りである。春日通りから、正門の両側に昔ながらの門前町が立ち並び､天神さまのご利益を願う善男善女でにぎわっている｡鳥居をくぐると、東西の池の上に藤棚が配置され満開の藤が大きな房を連ねているさまは見事なものだ。房の長さについては諸説あり、昔？は１メートルもある房が連なっていたとも聞いている。現在の房は、長いところで精々５０センチぐらいではないか？房の長さといえば、足利市の公園には、２メートルを超す房もあり､､規模と房の長さでは日本一ではないか？朝日新聞の写真で見るとまるで、７月の七夕様のお飾りのように見えたのを思い出した。さてこちらの藤に戻れば、鳥居をくぐって、中央のなかの島を経由し、傾斜のきつい、朱塗りの太鼓橋を二ツ渡った向こう岸は、玉砂利を敷きつめた本殿前である。学業成就をお祈りする正面本殿には長蛇の列が続いている。一体藤を見に来ているのか、それとも、学業成就を祈願に来るのか判断に苦しむほどのにぎわいぶりだ｡天神様がこんなに人気があるのは、参拝者が一石二鳥狙いなのかと勘繰るのはやはり、開祖菅原道真公に対して不謹慎なので訂正する。いずれにしても、美しい藤の花に敬意を表する。

これだけの人気を保つ秘訣はなにか？ビジネスモデルが必ずあるはずだ。学ばねばならない。

リフォームー２６

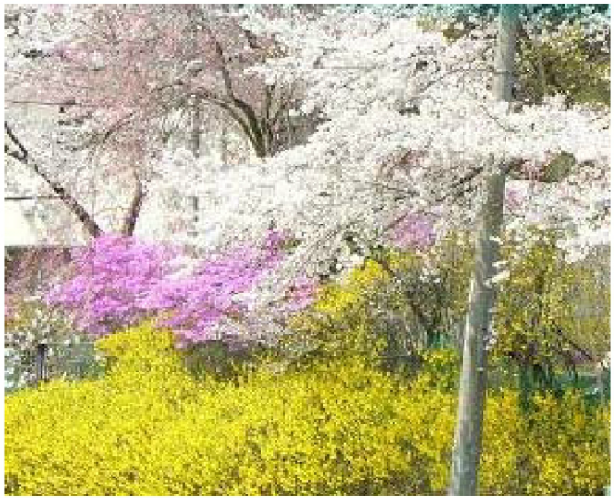
音響マニアとコラボレーション

ホームシアターとか、オーデオルームなど最近の流行りとして、お金に糸目をつけないマニアが、大勢いらっしゃる、この人たちは、ご自分の趣味を満足させるためには、オーバーに言えば、何事も辞さず実行される。常磐新線の開通で新しく生まれ変わった「アキバ」に行ってみるとそれと思しきマニアのかたが大勢いらっしゃることがわかる。オーデオショップでは、試聴室が設けられマニアのかたが、ご自分の選んだレコードを持って列をつくっている。結構な時間待つわけだが、意に介さず待っている。このようなマニアもご自分のお家はどうなっているかであるが、結構聴くのにご苦労されている。家のなかの家族に対する配慮、更に外に音がもれて、近隣迷惑などがあるが、最も重要なことは、質の高い音をいかに再現するかである。このことについては、オーデオメーカーが、鎬を削って競争している、一番の大元は音響機器であることは言うまでもないことだ。しかし音響機器に比べて、設備がいがいと進んでいない。折角よいものを持ちながら、機能を１００％発揮できず、宝の持ち腐れになっていることが多い。リフォームリニアールすれば、素晴らしい音響が楽しめるはずだ。このような需要をとらえていかねばなんらない。そのためには、機器メーカーや音響マニアとのコラボレーションで新しい音響設備を開発せねばならない。ご意見いただきたくお願い申し上げます。

１２９号　花の競演

ゴルーデンウイークの前半、新緑萌える美しい山々を縫うように中央道を一路、富士吉田の忍野八海まで行ってきた。当日は、朝から雨模様でこれではどうなるかと危惧していたが、現地到着どきにはすっかり晴れ渡り素晴らしい天気となった。富士吉田からアカマツ林を抜けるとすぐに忍野八海に到着した。高度の関係か百花一斉に花をつけ、しかも満開のため、実にこの世とは思えぬほどの見事さだ。もし、　極楽のお花畑があるならば、こんな景色と思いめぐらすほどの、素晴らしいものだ。赤松林の朱色の樹肌は東西の花道、斜面の中腹に点在する桃色の濃いミツバ躑躅は土俵お花畑の化粧回し、箒の先に米粒大に咲く富士桜、デント控えるソメイヨシノの古木は正に横綱だ、太刀持ちには貫禄充分八重桜　　山桜の清楚な白、そして根もとには、露払いのレンギョウが濃い黄色で控えている。正に百花咲き乱れての競演だ。そえにつけても、日本の四季は素晴らしい。こんなに、四季折々に花が咲きそれぞれに楽しませてくれる国はないと思う。こんなことを思うとき、日本に生まれてよかった。つくづく日本人でよかったと思う。日本の国土の６５％は山林地帯である。平野が少なく都市部に人口が集中している国だ。山には木の緑がいっぱいである。日本の四季折々を思うとき、山があり森があり木があればこその四季折々である。山は日本の宝であり、山を構成し、山を守り、山を育てる木は、日本の宝のなかの宝である。木には、このほかにも防災、治山治水の大きな役割があり、木は酸素を吐き出し、二酸化炭素を吸って固定する。やがて寿命がきた木は伐採されて、木材となり、住宅などに使われる。森で固定された二酸化炭素は住宅などで、さらに、長期間にわたり固定され、都会で第二の森となる。このように地球環境改善にもおおきな役割を果たしている。我々木材を「なりわい」としているものは、天の恵みである木材を、社会の役に立てる使徒であることを自覚し、その使命を誇りとせねばならない。

日本の宝を「なりわい」として、世の中に大きく貢献しているのである。木材業は、今逆風にあるが、我々の仕事の原点は、世の中の役に立っていることである。このことに、誇りと自信を持ち、逆風を跳ね返そうではありませんか“



細田通信１３０　リフォーム　２７

住宅はメンテ次第で長持ちする

少子高齢化に伴い新設住宅着工戸数は減少と予想されるなかで、２００年住宅が話題となっており､はたして超長期住宅がうけいれられるご時世か？様々な議論がなされている。日本における住宅について考えてみたい。超長期木造建築物の仕組みをみると、伊勢神宮は２０年ごとの遷宮、岩国の金帯橋は５０年ごとのメンテナンスを行っており、定期的に完全なメンテナンスが必須条件である。言いかえればメンテなくして超寿命なしである。となれば、メンテとはリフォームであり、リフォーム需要はますます広がることになることを前提として考えてみる。日本の木造住宅の仕組みは全国に通用する高度な分業体制で成り立っている。もっとも、詳しくは江戸間、京間、中京間とあるが、打ち合わせの時に、一枚の方眼紙に、それぞれの職種のグラッドが乗り全体として家が見える。

六畳といっただけで、全業種共通の情報の共有化がなされ仕事がスムースに進む、問題があれば、宿題として持ち帰り次回にすすむこの繰り返しで家が建つ仕組みだ。昔は、１０職種であったが、今は３０職種に増えている。全国津々浦々に分散しており、即メンテが可能な体勢だ。畳４年、浴槽、熱機器８年、流し１６年、配管、配線、部材３２年構造６４年とメンテの年限がほぼ決まっている。メンテさえきちんとすれば長持ちすることになる。人間も、自らの体の手入れを怠らず、健康に励めば、丈夫で長持ち長寿を全うすることができる。当たり前のことながら、何事も長持ちの秘訣はメンテナンス次第を学んだ。

続く

細田通信１３１号　リフォーム　２８

メンテは腕の見せどころ

日本の木造住宅はメンテさえきちんとすれば長持ちすることになる。メンテとは、リフォームすることだ。しかし、ここで問題なのは、マンションである。昭和４０年代から供給が本格化したマンションの総数は、約４００万戸１０００万人が居住している。築３０年超では平成１２年１２万戸であったが、平成２２年には約１００万戸になると推定され、この改修が大変である。周知のごとく、マンションの配管、配線などが壁内部に設置され取り換えができず、外付けにするなど問題化している。配管交換メンテはどうするのか、先進諸外国では、どうしているのか、ここが一番の問題だ。

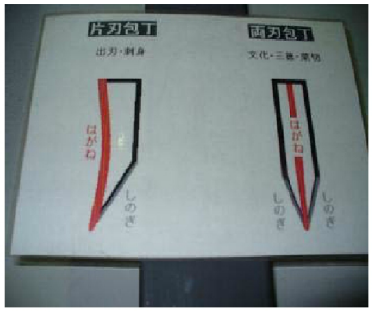
これからは､住宅の寿命は延びてくるのは､家主の高齢化により今更建て替えしなくても、リフォームして快適であれば満足だ。長く持った住宅をどれだけ、快適に生活できるようにできるかに焦点がしぼられてくる。そこで、リフォーム業者の腕の見せ所、舞台が出来上がる。激しい生存競争による優勝劣敗は，経済の法則だ、土岐にこれからの、リフォームは、腕の見せどころだ　続く

１３０号　北陸の技術

福井の歴史を紐解けば、西暦５０７年、国府（本拠地）と定められて、越三国を一つの国として、越と称しており、東は、越後の国現在の新潟県、中間は越中の国富山県、西が越前の国、福井県である。伝統産業の越前漆器や　羽二重、打ち刃物などの始祖でもある。越前の国は日本列島の中央部にあり、都（京都）の北の玄関口として栄えた。９９６年には、源氏物語の作者紫式部は、一年ほど越前で生活したと記録されており、文化も花開いた土地だ。越前市に昔からの伝統技術を持ち、盛業をつづけている特殊鋼材メーカーを訪問した。ブランドネームを、クラッドメタルと称している。異なる金属の素材を融合接着し、特性を組み合わせて新しい素材を作り出す技術だ。

例えば、鉄＋鉄＋ステンレス、はがね＋ステンレス＋はがね などであり、ここの経営者は何代も続く技術を受け継ぎ現代にあった複合技術を開発している優れた経営者だ。

彼は、自分はあくまでも、赤めた鉄を、ハンマーでたたき、地金をつくる会社だ。昔は刀、戦後は農業用すきクワ、刺身包丁から菜切り包丁、木工カンナ、大工さんのカンナまで叩いて造る村の鍛冶屋と謙遜するが、世界的な素晴らしい技術を持っている生産量の約２０％を輸出している。機械の地金、ドイツのジレット、ゾリンゲンに剃刀の素材を提供している。技術のポイントは、－１多積層（6 層）－２極薄　0.5 ミリ日本 0.1（砥石の技術）ゾリンゲン　0.6　－３耐久性　8000 度の焼却炉を設備している。



１３１号

緑の感謝祭

緑したたる日比谷の森、公園の中央広場で第 19 回森と花の祭典、緑の感謝祭には、名誉総裁秋篠宮殿下、紀子様はじめ、若林農林水産大臣、冬柴国土交通大臣、河野国土緑化推進機構会長・衆議院議長、辻林野庁長官など政府高官のほか、主催の農林水産省、林野庁、東京都、社団法人国土緑化推進機構、（財）日本緑化センター、東京緑化推進委員会など、関係団体と、民間の林野、木材関係者多数出席盛大に開催された。

秋篠宮殿下は、「緑は日本の宝物、国土を守る重要な資源として大切にしよう」とお言葉を述べられた。全国各地から集まった緑の少年団には、花と苗木の特別贈呈、緑の文化賞が贈られた。このほか多数の一般参列者には、苗木の無料配布があり、緑の感謝祭にふさわしい日であった。

私も業界団体の長として参列したが、

秋篠宮殿下の御言葉の通り、緑の森は、日本の国土を守る宝であり、宝を「なりわい」我々木材業者は、このことを、誇りとして、もっと胸を張り、堂々とアッピールしなければならない。ともすれば、目先の不況に目を奪われ、本質を見失っているのではないか。もっと自信をもって進むべきであると自信を深めた次第である。

細田通信１３２号　リフォーム　２９

同じ財布の争い

家主の高齢化により、長く持った住宅をリフォームしてどれだけ、快適に生活できるようにするかが、舞台となり、家主とリフォーム業者の腕の見せ所である。ここで、最大のポイントは、他業種との競争である。新築ならば、ローンを組み別予算計上で家を建てる。この場合の競争相手は、ビルダー間の競争であり、知りつくした相手との競争であるから手のうちはわかっており、競争しやすいはずである。ところが、リフォームとなれば、生活の本予算からの出費となり、ここが最大の勝負所だ。お施主様は、リフォームしようか、自動車買おうか、海外旅行しようか選択肢は沢山あり、おおいに迷うところである。リフォーム業者側からいえば、新築は手の内知った同業の競争だが、リフォームでは全く不知の異業種との競争になり、ここが知恵の見せ所である。多いに他流試合で腕を磨くチャンスだ。リフォーム業は飛躍のチャンスだ。続く

Ｉ３２号　消防團の活躍

東京消防庁「夢の島消防訓練場」にて城東消防團の消防訓練の成果を競う平成２０年度消防操法大会が行われた。当日は，生憎の雨、それも半端でない大雨が降りしきるなか、しかも日曜日にもかかわらず、城東消防署の指導のもと大勢の来賓と地域の役員など応援者の見守るなか、活発な操法（競技）が行われた。城東消防團の編成は、団長以下本部１２名のしたに、第一分團から第８分団まで定員２８０名合計２９２名の大世帯だ。

訓練は、それぞれ団から、指揮官以下、一番員から４番員まで総勢５名の編成である。スタートの笛を合図に、指揮官は所定の位置から約３０メートル全力疾走、火災現場付近にいる団長に、「第１分団ただ今から消火訓練を開始します」と報告、踵を返して、１番員にタッチ一番員はホースを担いで３０メートル全力疾走し、ホース解放、火事現場に到着、直ぐ後にポンプ班が続き、ホース連結、ホースの追加一本がなされ、放水開始する。ここまでを指揮官から５番員まで一致協力、指揮、規律、行動、操作、習熟度など総合的なチームワークで、スピードを競い、タイムを争う操法（競技）である。ちなみに、城東消防團は都内にある４８消防署の操法でもたびたび優勝している名門分團がおおいことで有名な消防団だ。当日は第一分團が優勝した。消防團は、準公務員扱いと聞いているが、いつ起こるかもしれない災害に備え、休日も返上して地域の防災のため日夜の訓練は、頭の下がる思いを痛感した次第である。